



宇都宮 正男

はっきりわかることはですね、何より大人と子どもは続いている。つながっているということなんです。これが、今まで生きてきた私が、もし子どもだった半世紀前の自分に何かいってやることができれば、いいたい一番の秘密だと思うくらいです。

(「自分の木」の下で 大江 健三郎著)

今を生きている私たちは、大人であっても子どもであっても、この世に生まれてから今日までの生活の中で培われた土台の上で生きているのであり、その人の物の見方、考え方、感じ方、振る舞いの仕方は、これらの体験を踏まえて形成されたものに他ならない。

このように考えると、体験は、私たちの生活や、価値観や人生観さらには生き方をも左右するものであるといえよう。

そこで、ここでは御五神島・無人島体験事業のような「一定期間、ある目的を持って、仲間が共同活動をする」体験活動が、子どもたちの人間形成にどう機能するのかについて、感想文をもとに読み解いてみたい。

大人であっても子どもであっても、家庭、地域、学校・職場、第四の領域（趣味の会、スポーツクラブ、同級会等々）に所属して生きている。それぞれのかかわりの度合いは、年齢や個々の事情により異なるのは当然であるが、どの領域にも居場所があり充実感、満足感が味わえ、自己実現が図れることが求められる。「家庭、地域、学校・職場、第四の領域」は規模の大小はあるにしても、全て複数の人間がかかわって活動している「社会・集団」であると考え、そこには共通する重要な要素が存在する。

- ・ 無人島では働くことが毎日ありました。みんなそれぞれ自分の役割があって、それに全てを注ぎ込んでいました。
- ・ ぼくはかまどの仕事を担当しました。火の番は暑く苦しかったけど、がんばりました。
- ・ 御五神島に行ってよかったことは自分から進んで割り当てられた仕事ができただけです。
- ・ 人手が足りない時、自分から動くことができ、人の役に立つことができました。
- ・ 本部にいろんな物をもらいに行く時、人手が足りない時がありました。そんなとき自分から動くことができ、人の役に立つことができました。これからも、家族や友達が困っているときには、何かできることを考え、助けることができるようになりたいです。

これは、無人島体験事業を通しての子どもたちの感想である。大人でも子どもでも、社会・集団の中で自分らしく生き活きと活動していくうえで、最も大切なのは、「出番」である。活躍の場といってもいいし、自分が果たすべき役割があるといってもいい。それは与えられる場合もあるし、自分で見つけ出す場合もある。その役割を果たすことを通して、他者や所属する集団に役立っていることを実感したり、責任を果たしていることへの満足感を味わったりすることになる。

- ・ 飯台がうまく立たず困っているとポルコさんが手伝ってくれました。ご飯を炊くときもスイ君が火をつけてくれました。みんなの力でぼくがいることがよく分かりました。
- ・ 朝露の影響で一本目のマッチでは火はつきませんでした。二本目浜ッコの助けをもらってつけることができました。今回薪を燃やす仕事を担当しましたが、それはぼくだけじゃできなかったことだと思います。

- ・ ぼく一人ではアイデアも力も足りなかったのを仲間が補い、協力して整えてくれました。
- ・ 協力しないと生活できないし、みんなで協力することで達成感を味わうことができました。
- ・ 今回の無人島生活では班のみんなのためにがんばって働き協力しあうことができました。無人島では、協力しないと生活できないし、みんなで協力することで達成感を味わうことができたからです。

また、自分の役割を果たしたり、共通の目的を達成するためには、家族や仲間同士助け合ったり協力しあったりすることが必然的に必要になってくる。共に力を合わせてがんばっていると、自分一人ではできないこともできるし、「してもらう喜び」「してあげる喜び」「協力し合って何かをなしとげる達成感・充実感」も味わえるし、「仲間との関わり」も深まり、信頼関係も強くなってくる。また、「みんなで活動することの楽しさ」が味わえ、いつの間にか集団への「所属感」、仲間としての「一体感・連帯感」などが高まっていく。

- ・ マッチが二日目でなくなり、これからどうするのかを全員で考えた時初めて一致団結できたと思いました。このメンバーといっしょにやることで、新しい可能性を見つけ出すことができました。
- ・ 今まで私は集団で行動するのがあまり好きではありませんでした。でもこの無人島生活で仲間の大切さを学びました。
- ・ 足のけがのことを周りの友達が心配して何度も声をかけてくれたり、座ったままでもできる仕事を教えてくれたりしたので何とかがんばれました。
- ・ 無人島生活は逃げる場所もかくれる場所もなく、最初は怖かったです。でも、もしもう一度行けるならこのメンバーと一緒に最初からテンションをあげて楽しくやっていきたいと思っています。
- ・ キャンプファイヤーの火を囲んでみんなの心が一つになった気がしました。最後にみんなと握手したとき、もう終わってしまうんだなという寂しさと、こんなにたくさんの人に支えられて生活していたんだなというありがたみをすごく感じました。
- ・ 無人島生活最初の夜、37度の熱が出ました。とてもしんどかったです。でも、次の日の朝はすっきりして気持ちよく起きることができました。それは、るいいるいが一晩中見守ってくれたり、班の仲間が応援してくれたりしていたからだだと思います。本当に仲間の大切さを感じました。

さらに、このような活動をしている中で、自分自身を見つめなおし、時には自信を失うこともあがるが、がんばって何かを成し遂げ仲間とともに喜び合える体験ができれば、自分も努力すればかなりのことができるなど「自己肯定感」を高めていく機会ともなる。

- ・ この十日間で学んだことは、自分がどれだけ自己中心的な行動をとっていたかということです。無人島生活では楽しいこともあったけど苦しいこともたくさんありました。けれどそれを乗り越えるたびに自分が成長していくことを身近に感じました。
- ・ 自分が変わったと思うところは、自分から進んで何かができるようになったことです。
- ・ 前の自分は、「いや」とか「むり」とか言って自分でちゃんと行動しないことがあったけど無人島生活をして、言われたことはちゃんとして自分で行動できるようになりました。
- ・ 成長したことは、料理の力です。ぼくは料理がまったくできませんでした。でも御五神島での生活を通して、少しずつ料理ができるようになってきました。そんな自分の成長を感じてとてもうれしいです。

また、子どもたちはお互いが認め合い、支え合い、励ましあう活動を繰り返す中で、「ありがとう」という言葉が自然に増えてくる。それは関わり・絆が深まっていることの証であろう。それは家族や地域のお世話になっている人たちへと波及していく。そのことが下記の子どもの感想に端的に表れている

- ・ 成長できたことは多々ありますが、一番は「あきらめない」という姿勢です。このことを学ばせていただいたみなさんに感謝しています。
- ・ テントサイトコンテストで、一人一人で考えたり、班のみんなで話し合ったりして、協力して作ったものが、「素晴らしい」と言ってもらえてとてもうれしかったです。自分に自信が持てるようになりました。

- ・ ぼくは、お母さんに感謝しています。なぜなら、無人島生活で大変だったご飯作り、洗濯、や皿荒いを毎日してくれているからです。
- ・ 初めて魚を自分でさばきました。直前まで生きていたので、さばいてしまうのはかわいそうでしたけど、感謝の気持ちを込めてさばきました。これからも、どんどん新しいことに挑戦したり、感謝の気持ちを表したりということを続けていこうと思います。
- ・ 飯盒の外蓋がなくなったとき、心配してくれたポルコさんが一緒になって探してくれました。そして、やっとの思いで見つかりました。私はポルコさんに感謝の気持ちでいっぱいでした。
- ・ 一班のみなさん、この十日間、ものすごく頼りない班長だったけど、しっかりついてきてくれて有難う。またみんなに会える日のことを楽しみにしています。
- ・ 無人島から帰ってきたときに入った温泉の湯があまりにも気持ちよくてびっくりしました。入浴がこんなに気持ちの良いものなんて、素晴らしいと思いました。
- ・ いつもあるものがない無人島で生活し、電気、ガス、水など普段当たり前に使っていたものが、とても大切でありがたいものなだと改めて感じることができました。

無人島体験事業は、普段見過ごしている大自然との関わりや自分自身を見つめ直す機会にもなっている。無人島体験事業も東日本大震災とは比較にならないが、私たちにとって大切なものは何なのか、普通に生活していけることが、どんなに幸せなことなのか、人と人とのつながり・絆がどんなに大切かなどに気付かせてくれたようである。また、この体験を通して、新しいことや自分の将来への夢にも挑戦していこうとする姿勢も培われたようである。

- ・ 無人島で、自分で料理を作っているうちに、たくさんの料理が作れるようになりました。家でも家族に作ってあげたいと思っています。
- ・ 最後に自分が変わったと思うところは、自分から進んで何かできるようになったことです。前はめんどくさくて何もしなかったけど自分からできるようになりました。この無人島生活体験で学んだことをこれからの人生のどこかで生かしていきたいです。
- ・ 普段は、あまり積極的ではないけど、無人島では最高学年として、自覚を持って、少しは積極的になれたと思います。日がたつにつれて多くの人と話すことができました。これからは、いろいろなことに挑戦する気持ちを持って取り組み、自分の可能性を広げていきたいです。
- ・ 何もないところから、快適に暮らせるまでになったのは、みんなで努力したからだと思います。みんなで努力して一つのことをやりとげる大切さが分かったので、家の手伝いをするなどして生活に生かしたいです。
- ・ 成長できたことは、多々ありますが、一番は「あきらめない」という姿勢です。このことを学ばせていただいたみなさんに感謝したいです。

- ・ 無人島生活を終えて自分を振り返ると、何かをする時の行動が速くなり、少し工夫して取り組むことができるようになったと思います。無人島で体験したことを生かして、その経験をみんなに伝えたり、自分に与えられた役割をしっかり果たしたりして、みんなのために働くことのできる人になりたいと思います。
- ・ 私は一日だけとても眠れない日がありました。それで夜にこっそりテントから頭を出して夜空を見たことがあります。私が住んでいるところの見え方と違って、とてもきれいな星空で感動しました。あの日見た夜空は一生忘れません。
- ・ 本当にこの体験でものすごいものをもらいました。それは一生に一度の忘れられない思い出、仲間、協力する心、自分の課題を見つける力などです。これからも、そのことを忘れないで生活していきたいです。
- ・ 大変なことがたくさんありました。雨やかぜでタープが飛びそうになったり、マッチの火がつかなかったり、テントがひっくり返りそうになったり、・・・でも、そんなことがあったおかげで仲間と協力できたり、自然のすばらしさを知ったりできたのだと思います。

どのような「社会・集団」においても、お互いに認め合い、支え合い、励ましあって共通の目的・目標の実現に向けて努力していくことが、人が生きていく生活していくということであると考えます。そのために重要なことは、第一に、「一人一人に活躍の場『出番・役割』が保障されること」、第二に、「所属する社会や集団の一員であることに誇りを感じる、あるいは中間の一人であることに喜びを感じること」、第三に、「所属する社会や集団の目的や目標に、あるいは実現しようとしている課題に大切さや重要性などの価値を感じること」そして、第四に「社会・集団の一員としてがんばっている自分自身に自信が持てること」である。御五神島・無人島体験事業は、このような「社会・集団」の中で生きていく上で最も重要な「生きる力の根幹」を育ててくれる事業であることを参加した子どもたちの感想文が証明してくれている。

国立大洲青少年交流の家での閉会式で、子どもたちは涙を流しながら別れを惜しんでいた。わずか十日間で、子どもたちの絆がこんなに深まったのは、「苦しくて辛かったけどとても楽しかった」という言葉に象徴されている。電気もガスも水道もない。水洗トイレも風呂も冷蔵庫もエアコンもない御五神島での暑くて不便で不自由で不足だらけの生活をみんなが力を合わせて共に乗り切ったからであろう。作家の遠藤周作氏が「小説を書くことは『苦る楽しい』ことだ」と言っている。苦しみを乗り越えてこそ本物の楽しさが味わえるのであると、子どもたちも「しんどさ・苦しさ・厳しさ」に耐え、それに打ち克ってはじめて、本当の楽しさ、充実感、満足感を味わうことができるし、自信もついてくるものと考えます。御五神島はそのような条件を十二分に満たしてくれている。

未来を生きる子どもたちには、自分が出会った状況と正面から向かい合い、夢や希望を実現するために、限界に挑戦する体験が強く求められていることを、無人島体験事業に参加した子どもたちが教えてくれたように思う。

次年度で第25回目を迎える御五神島・無人島体験事業が、これまでお世話になった各種団体、企業、関係機関の皆様のご支援を得て、今後も末永く継続されることを心より願っています。

息子は、現在でも無人島の話をよくします。よほどうれしかったのでしょうか。無人島から帰ってきた息子は、ずい分お兄さんになったねと、よく知り合いに言われます。母として本当にうれしく思います。

何ごとにも挑戦する勇氣、一步を踏み出す気合いを培ってくれた本事業に感謝しています。  
(ある母親の感想文より)

